

第23回 ある英国農業者の本音

この9月に英国の南部を訪れ、農村をまわった。今年の英国の天気はそれまでずっと長雨が続き、会った農業関係者の誰もが口を揃えて「過去20年で最悪だ」というようなものだった。しかし私達が訪問した9月上旬は、今年で初めてという1週間の好天が続き、どの地域でも農家が大型機械に乗って暗くなる

まで作業している様子が見られた。

英国南西部デヴォン州の農業者デレク・ダイアー氏も、連日遅れた農作業を取り戻すべく働いているとのことだったが、「昔日本に行った時に、日本の人にとっても親切にしてもらったから」と、私達のために1日近くを割いて農場を見せてくれ、色々な話をしてくれた。49歳という比較的若い年齢にも関わらずダイアー氏は北部デヴォン地域の農業者組合の会長をしており、自らの農業経営のみならず地域内、さらには世界の食料問題をも見据えた農業に対する持論を語ってくれた。



1 経営の概要

ダイアー氏の経営するフェアリンチ農場は、英国南西部のデヴォン州の北側、大西洋にごく近い地域にある。デヴォン州には2つの国立公園がある他、北部海岸線は起伏に富んだ岸壁が続き、特別景観優良地域（AONB）に指定されているなど、自然の豊かな地域である。



フェアリンチ農場

ロンドン



フェアリンチ農場からの眺め。向こうに大西洋が広がる。

ダイアー氏は 140ha の経営面積で、耕種と畜産のいわゆる混合農業を営む。350 頭の羊と 30 頭の繁殖用雌牛を飼い、140ha の農地のうち、20ha で大麦を作り、あとは草地となっている。英国の南東部に比べて冷涼で雨の多いこの地域では、伝統的にこのような混合農業が営まれてきているが、ダイアー氏は、その中でも比較的粗放的な経営を行い、生物生息地として価値の高い草地を維持管理するなどの農業環境事業に取り組むことで、年間 150 万円ほどの農業環境支払いを得ている。140ha の約半分が自作地であり、借地は、今年、隣の有機農

業を営む農家が辞めたため、その 25ha を借りて増やしたばかりである。また、この地を訪れる観光客のために、夏の間だけキャンプサイトを営んでいる。

労働力はダイアー氏本人の他、パートでトラクターマン（農業機械を使って農作業を行う人）を雇っている。

生産した子牛は生後 18 ヶ月で英国南東部の肥育農家に売り、そこでさらに 18 ヶ月肥育される。大麦は「自分で配合するより安いからね」と、飼料工場に売っている。



フェアリンチ農場は草地の一部で夏の間キャンプサイトを営んでいる

2 ダイアー氏の農業経営についての考え方

ダイアー氏の先祖は 200 年にわたり代々この地で農業を営んできた。ダイアー氏自身は、レディング大学で農学を学んだ後、職に就くまでの期間を活用してニュージーランドに滞在し、そこで農業への助成を無くすという大きな政策転換の現場を見た。一方、当時の英国は共通農業政策のもとで、補助金をあてにした農業の集約化が進んでいたが、ダイアー氏は英国でも農業への補助金が無くなる時代が来るのではと思い、粗放的な経営を行うことにしたようだ。「た

だし、補助金は今も続いているけどね」とダイアー氏は苦笑いしつつ加えた。

そういうダイアー氏の農業経営の理念は、「食料を十分に作ると同時に野生生物の生息地を提供すること」である。

ダイアー氏は集約的な農業経営も、有機農業のような環境保全に一層傾斜した農業も志向しない。集約的な農業経営を行うことについて、「穀物価格の高下が激しい昨今において、そういう経営はギャンブルだ」と言う。一方、農場内の SSSI（特に価値の高い生物生息地として指定された土地）を維持・管理し、農地の周縁部の環境価値を高める様々な取り組みを行うダイアー氏だが、「食料供給あつての農業」が基本であり、食料安全保障の重要さを熱く語る。

「農業の生産性はこの 50 年間伸びてきたが、今はピークに近いだろう。食べきれないほどに生産できるようになったのは、長い歴史の中でこのわずか 20～30 年だけだ。これから中国などでの肉類消費が増えることを考えれば、過剰状態が続くとは思えない。気象変動への懸念もある。食料生産の持続が必要だ」「生産性の高い農地では十分に食料を生産し、生産性の低い周縁地は良好な生物の生息地とするのがベストなやり方だ」「農業者は食料生産を通じて収入を得るべきだ」と主張する。



そういうダイアー氏は、有機農業について「農地で食料を生産していない」と批判的だ。「我々は農薬を使うことで、十分な食料を供給しているのだ」と主張する。今年から隣の有機農業に取り組んでいた農地を借りたが、「雑草ばかり生えている。これから時間をかけて良い農地にしていかなくてはならない」とのことだった。ちなみに、この農地を借りたことについて、「隣が空いたので、思い切って借りることにした。農地の場所はまとまるようにしている」そうだ。

隣の農家が辞めたように、この一帯の農業者も高齢化が進んでおり、ダイアー氏自身はこの辺りでも若い方の農業者である。周囲の農家の多くは60歳を越え、新たな投資なども難しい年代だ。一方、農外から農業に参入するには、農地や機械・施設の購入や、平均して農業所得の半分を占めると言われるEUによる単一支払い受給の権利の購入に莫大な資金が必要であり、「ほとんど不可能な状態だ」という。



昔使っていたリンゴの压榨器を見せるダイアー氏。経営主がこのリンゴジュースを発酵させたサイダー（酒）を雇用者にふるまうことが、昔の習わしだったそうだ。

ちなみにダイアー氏自身には4人の子供がおり、そのうち息子は1人。現在大学で動物学を学んでいるそうだ。息子が農業を継ぐかどうかについては、「わからない」が「息子が決めることだ」と言った。

かくして、ダイアー氏が隣の農地を借りたように、残った農家が経営を拡大していくわけだが、このような農家の減少、大型機械作業の増加は、「農業者の孤独」という問題を引き起こしているそうだ。昔は農業部門には農業者に加えて農場での雇用者も多かったが、今では農業者数は減り、雇用は機械にとって替わられた。「自分は町に隣接して住んでいるからいいが、農村部で農地の真ん中にぼつんと住んで農業を営む農業者などは、本当に孤独だ。問題だと思っている」とダイアー氏は語った。

3 ブラウントン湿原の草地の管理

ダイアー氏は、地域の農業者組合会長の他に「ブラウントン湿原水利組合長」という別の肩書きを持つ。ダイアー氏の住むブラウントンの町の南側の海と川に挟まれた一帯に広がるブラウントン湿原は、19世紀にオランダの技術を用いた干拓が行われ、農家の共有地として家畜の放牧に使われる他、生物生息地としての高い価値を持ち、また、人々が湿原や砂丘でのハイキングを楽しむ場所でもある。水に囲まれた広々とした草地と、所々に建つ牛のシェルター用の伝統的な建物は、独特の美しい景観を形作っている。

ダイアー氏が組合長を務める干拓地は、現在は20人の農業者の共有地となり、家畜の放牧に使われている。水に囲まれた広大な草地は、野鳥などの生息地として価値が高い。草地の維持のためには、一定数の牛の放牧が望ましいが、農業者の高齢化・牛の移動の手間などにより、放牧が十分に行われなくなってきたのが懸念材料だ。一方、干拓地の一角に生物生息地保全のため国の機関が管理している区域があるが、この区域の葦などが伸び放題の状態について「これでは野鳥が飛び立つこともできない」とダウアー氏は批判的で、「長年培ってきた農業活動を通じた生物生息地の保全」こそが望ましい姿だと主張する。

英国の農業者は、競争力のある強い農業を営むことと、「国土の管理者」としての役割との両立を求められている。EUの農業助成は、食料生産よりも環境保全に対するものへと移行しつつある。ダウアー氏の主張は、それに対する農業者の対応と言いつの1例なのである。



ブラウントンの湿原に広がる
草地とそれを囲む水路



草地に建つ牛のシェルター



オランダの技術を用いた
水門。潮の干満により自動
的に開閉する。